

# 手ぶくろを買いに



新美 にいみ

南吉 なんきち

作 さく

年 組

名前

## ご使用に当たって

この授業プラン「手ぶくろを買いに」は、科学的授業実践研究会が提供する児童用テキストです。このプランには、いくつかの特徴があります。

このテキストは、児童への配付の際は、学習を終える毎に、一枚ずつまたはあるまつまり毎に数枚ずつ渡していきます。最初から全てのページを渡したりはしません。既にこの物語を読んで物語の筋を知っている児童もいるかと思いますが、それでも少しずつ渡していくことには意味があります。おそらくどの子ども、一枚ずつかあるまつまり毎に数枚ずつ受け取ることで、物語の展開に強く関心を寄せるようになることでしょう。

この授業プランが製本されていないのは、そもそも印刷して渡すことを前提にしているからです（バラの状態でないと印刷の時に苦労しますね）。授業プランはA5版で提供していますが、拡大してA4版にすると更に使いやすくなります。ところで、子どもたちは、このバラのプリントを受け取って学習を進めていきますから、紛失しやすくなります。そこで、チャック付きのポリ袋を子どもたちに持たせて、それに入れさせるのも一つの方法です（ファイルよりも嵩張らず、机の中や鞆の中に入りやすいでしょう）。

このテキストでは、子どもたちに新しい学習活動を行わせる際は、その学習活動について説明をしています。それにより、指導者は学習活動の仕方について、特別に説明を付け加える必要はありません。これは、どの指導者がこのプランを利用しても、子どもたちがほぼ同じ理解に達することをめざしたものです。ですから、逆に言えば、このプランの中の説明の仕方、常に一定数の理解できない児童が出てくるとしたら、この説明の仕方に問題があることになります。そうであれば、もっと分かりやすく書き直したり、書き加えたりする必要があることになります。

授業プランは、作業付きの解説の部分と本文の部分から成り立っています。1単位の授業は、この両方で構成されます。

授業展開の原則は、

- ①本文を読みながら書きこみをする（同時に意味も知る）
- ②音読をする
- ③書きこみを元に話し合いをする
- ④話し合いを元にくわしい話しかえ、または、感想・意見を書く
- ⑤くわしい話しかえ、または、感想・意見を発表する
- ⑥小見出しをつける
- ⑦表現読みをする

となります。

①の書きこみは、文章をよりイメージ豊かに読む過程であり、具象化・表象化・分析の過程と言えます。③の話し合いは、①で膨らませたイメージを元に詳しく話し替えていく過程です。④のくわしい話しかえ、感想・意見では、③の「集団読み」を踏まえて、自分のイメージや考えを文章化するのですが、くわしい話しかえの場合は、再び具象化・表象化・分析の過程を踏み、感想・意見の場合は、総合・抽象化の思考が働きます。⑥の小見出しづけでは、その場面を短く話し替えることとなります。これも総合・抽象化の思考過程です。⑦の表現読みでは、⑤の過程で集団的に読み取ったことも含めて、表象豊かに声に出して読むことによって学習をまとめていきます。もちろんこれは原則的な授業の流れを示したもので、学習箇所により一部を省くことがあります。これらの授業の流れの内、①は「ひとり読み」と言われる学習であり、③と⑤は「集団読み」と言われる学習です。

発達論的に言えば、具象化よりも抽象化の方がより高度な活動です。3年生の段階では、具象化はかなりできることでしょう。具象化は言葉に反応して、具体的な事物・感性・情景を表象化することですから、具体的な体験等に制約はされていますが、かなりできるようになっています。これに対して、抽象化は、物事の内容を形成する過程を経ますから、高度な認

識活動となります。小見出しづけと感想・意見出しでは、この点の配慮が必要です。

「ひとり読み」はひとり勉強とでも言うべきものですが、この授業プランでは、大変重要な位置を占めます。学習を始めるに当たり、「まず初めに子どもの読みありき」なのです。書きこみを通して主体的な読みを促し、これを以後の学習のベースにしています。

「集団読み」では、特に指導者による話し合いの方向づけが重要です。ただ、指導者が子どもの発言を評価する際には注意が必要です。子どもたちが教師の反応を伺って発表するようにしてはいけません。指導者は、子どもから問題を含む発言があっても、直接のコメントを控えるのが原則です。子どもの中からそれについての発言が出てくるのを待つと良いでしょう。指導者による話し合いの方向づけとは、子どもの中から発言が出てくるように暗に導くことです。どうしても、子どもたちの話し合いの中で、解決できなくてコメントしておかなくてはならないことが残った場合は、話し合いを聞いての感想として、後で適時話をすれば良いでしょう。原則は、子ども同士の話し合いを膨らませることです。

こうした話し合いの方向づけについては、このテキストの中ではプラン化していません。例え話し合いのテーマがあったとしても、その学級の子どもたちが、どのような順で、どのようなことを発表するかは一概に予測できないからです。この点では、授業記録による授業分析を期待します。

言葉の意味については、国語辞典による意味調べを廃しました。このことにより、意味調べに要する時間を大きく節約できるようにしています。意味は、本文中にできるだけ平易に説明しています。3年生で国語辞典の引き方を学習するのですが、その導入の時期は、使っている教科書により、また、指導者の考えによりまちまちです。この意味調べの導入の時期も考慮しているのですが、例え国語辞典を使い始めていたとしても、この時期

の児童にとっては、辞書の文言から適切に意味をくみ取ることが難しいことがよくあります。この点にも配慮した措置です。

漢字の扱いについては、3年生配当の漢字には全て振り仮名を振っています。また、提供本では3年生配当の漢字を赤色で印刷しています。このことにより、3年生であれば、学年のどの時期に学習しても、このプランを学習する上で、支障がないようにしています。(ただし、3年生後期以降に利用されることを推奨しています。) 該当漢字の取り扱いに当たっては、次の約束があります。解説と本文は別々に、初めて出てきた時の3年生配当漢字のみを対象として赤字にしています。また、振り仮名がついていても、3年生配当ではない漢字もありますが、その場合は初めて出てきた漢字でも黒色です。

現在、『手ぶくろを買いに』を掲載している教科書はありません。ですから、この授業プランを実践するとすれば、投げ込み教材という扱いになることでしょう。そこで、時数をどう取るかが問題となります。1単位の流れは先に説明しましたが、この1単位を1時間で行うことに固執することは実際的ではありません。1単位は1つの「立ちどまり」に相応しますが、丁寧にすれば数時間にもなりますし、簡単に済ませようと思えばできないこともありません。このことをどう考え、いかに展開するかは指導者にお任せするところです。ちなみに、このプランでは、子どもたちの学習活動がかなり濃密に組まれています。特に学習内容を書きとめることが多いので、各自が前時の学習記録を元にすれば、少し間を置いても、継続して学習に取り組めると思います。

このプランを学習し終えた子どもたちが、言葉が豊かになり、物語を読むことが好きになることを期待します。そして、何よりも、子どもたちが学習に生き生きと参加する姿を垣間見ることができればと思います。



## 【話し合い】

前のページで書いたことを<sup>はっぴょう</sup>発表しましょう。

ただし、このお話を読んだことがあって、③について書いている人は、この③の部分だけは発表しないようにしましょう。友だちから読む楽しみをうばうことになるからです。

### 発表のやくそく

グー：だいたい同じ、同じ、つけたし、そうだと思うとき

チョキ：それはちがうぞ、こう考えることもできるぞと思ったとき

パー：話をかえたいとき、べつのことで発表したとき

発表のやくそくにしがって発表しましょう。さいしょはみんなパーから<sup>はじ</sup>始めます。

## 【話し合いメモ】

心にのこっただれか一人の発表を書いておきましょう。

---



---



---



---

## 書きこみ

お話を読む時に、<sup>ぎょう</sup>行と<sup>ぎょう</sup>行の間などに言葉や線などを書き入れることを、「書きこみ」といいます。書きこみをすると、考えたことや思ったことをメモにしてのこしておくことができます。

さっきは、「手ぶくろを買いに」という短い言葉だけで、たくさんのことを考えましたね。文の中にはたくさん言葉があるのですから、そのひとつひとつの言葉について考えると、いくらでも考えがうかんでいきます。その頭の中にもうかんできた言葉を文字にして書いていくのです。たくさん書きこみをしようとする人ほど、頭をかしこくすることができます。

<sup>つぎ</sup>次のページの「書きこみをするときの<sup>ちゅうい</sup>注意」をよく読んでから、「書きこみ」にちょうせんしてみましよう。



書きこみをするときの注意：

- ① 言葉の横に線を引くときには、言葉の右に線を引きます。また、言葉全体を丸でかこんでもいいです。
- ② 言葉を書きこむときには、引いた線の右がわから書き始めるようにします。書ききれないときには、左がわも使ってもいいです。

これらはいいです。

こんなふうには言葉の右に線を引いて、

その線の右に自分の言葉を書きこみます。

このつづきを書きこんでみましょう。

冬のお話なんだな。きつねのお話なのか。

寒い冬が北方から、きつねの親子のすんでいる森へもやって来ました。

本当に寒そうだな。

たったの1行の文なのに、たくさん書きこみができたこと  
でしょう。

その書きこんだことを、せきにすわったまま、何回も声に  
出して読んでみましょう。

### 【話し合い】

書きこんだことを発表しましょう。「発表のやくそく」にし  
たがって手を上げて発表します。

発表するときには、「何々のところで」というように文を読  
んでから発表しましょう。

たとえば、4ページのれいのように「<sup>さむ</sup>寒い冬」の横に線を  
引いて書きこみをしている場合は、

「寒い冬 のところで、冬のお話なんだな、と思いました。」

というように発表します。

## 読みの記号(1) — 「わかったこと」と「思ったこと」

たくさん書きこみができたので、それらの書きこみを整理しておきましょう。

みんなの発表を聞いていると、書きこみを大きく2つのしゅるいに分けることができます。それは、「わかったこと」と「思ったこと」の2つです。

たとえば、れいにある書きこみでいうと、「冬のお話なんだな。」と「きつねのお話なのか。」は、それぞれ読んでわかったことです。それに<sup>たい</sup>対して、「本当に寒そうだな。」という書きこみは、思ったことです。

文章を読むということは、多くの場合は、まずわかり、それから思うことです。

そこで、わかったことを書く時には、(わ)という記号を、思ったことを書く時には、(お)という記号を、書きこみのはじめに書くことにしましょう。これらを「読みの記号」ということにします。

それでは、4ページでした書きこみを見て、書きこみのさいしょの<sup>ところ</sup>所に読みの記号(わ)(お)を書き入れておきましょう。

お話のつづきを読みましょう。読みの記号を使いながら、書きこみをしましょう。

ある朝、ほらあなから、子どものきつねが外に出ようと思いました、

「あつ。」

とさけんで、目をおさえながら、母<sup>かあ</sup>さんぎつねの所<sup>ところ</sup>へ転<sup>ころ</sup>げてきました。

「母ちゃん、目に何かささった、ぬいてちょうだい。早く、早く。」

と言いました。



## 読みの記号(2) — 「思ったこと」のなかみ

「子どものきつねは、あまえっ子だな」と思った人がたくさんいましたね。それは、子ぎつねの言葉「ぬいてちょうだい。早く、早く。」という言葉からもそのように思えます。また、「何が目にささったのかな」とか「母さんぎつねはどうするのかな」とか思った人もいることでしょう。

思ったことのなかみをよく考えてみると、目にささったものを知りたいと思ったり、これからどうなるのかなと思ったりもしていることがわかります。これらは、「あまえっ子だな」と思うのとは少しちがっていますね。

そこで、「知りたいこと」「わからないこと」「ぎ問に思うこと」などを書くときには、新しい読みの記号(㊦)を使うことにしましょう。

また、どうなるのかな、というように先のことを考えるときには、これは「<sup>よ</sup>予想」することですから、(㊧)という読みの記号を使うことにしましょう。

(㊦)と(㊧)は(㊨)の中にあつたなかみです。でも、(㊦)と(㊧)を(㊨)の中から取り出したのですから、これからの(㊨)はこれまでとはちがって、なかみが<sup>かる</sup>軽くなったことになります。

それでは、今回はすでに書いている7ページの(㊨)の記号は<sup>け</sup>消さずに、(㊦)や(㊧)の記号を書きくわえたり、さらに書きこみを書きたしたりしておきましょう。

**【問い】**

ところで、「何が目にささったのかな」とか「母さんぎつねはどうするのかな」とか思った人の中で、自分でその答えのようなものを書きくわえている人がいるとしたら、書きくわえていない人とくらべて、どちらの人の方がよいと思いますか。

ア 自分に問いかけて<sup>お</sup>終わっている人の方。 ( ) 人

イ 自分が想ぞうした答えも書いている人の方。 ( ) 人

実は、書きこみで、問いかけをする時に大切なことは、イのように自分が想ぞうした答えも書くことです。まず アのように自分に問いかけて、イのように答えも書くということです。

ですから、これからは、自分に問いかけて終わるのではなく、自分の問いかけに対して、自分の想ぞうや考えなどを書くようにしましょう。

では、②や⑤の記号の所をもう一度見直して、問いかけて終わっている所は、そこに自分の想ぞうした答えも書きくわえておきましょう。

思ってもみなかったことになって、  
おちつかずに、うろろろすること。

母さんぎつねがびっくりして、あわてふためきながら、目をおさえている子どもの手を、おそろおそろ取りのけてみましたが、何もささってはいませんでした。母さんぎつねは、ほらあなの口から外へ出て、はじめてわけが分かりました。さく夜のうちに、真っ白な雪が、どっさりふったのです。その雪の上からお日様がキラキラとてらしていたので、雪はまぶしいほど反しやしていたのです。雪を知らなかった子どものきつねは、あまり強い反しやを受けたので、目に何かささったと思ったのでした。



## くわしい話しかえ

たくさん書きこみができましたか。書きこみがふえたということは、それだけたくさんのかたのことを頭の中に思いうかべながら読めるようになったということです。

このことは、文章を読む時に、とても大切なことなのです。

考えてみれば、文章はただの文字のれんぞくです。それを声にして読んでいるだけなら、ただの音にすぎません。CDプレイヤーでも声（音）を出すことはできます。でも、CDプレイヤーは、自分では何も考えていません。

それに対してわたしたちは、文章を読んでいる時、ひとつひとつの言葉から、知っていることをあれこれと思いえがきながら、それらを頭の中でつなげているのです。

それでは、書き込みをして頭の中にたくさんのかたのことを思いうかべたので、前のページの場面をくわしく話しかえてみましょう。この場面では、母さんぎつねになってくわしく話しかえることにします。

母さんぎつねが、どんなお母さんなのか考えてから書き始めると書きやすくなりますよ。



## こみだ 小見出し

ここまでのお話のくぎりを「立ちどまり①」とよぶことにします。「小見出し」とは、この立ちどまりごとにつける題のようなものです。小見出しはそれを読んだだけで、書かれている内ようがわかるように書きます。

小見出しは、<sup>みじか</sup>短い言葉ではなくて、短い文にするとよいでしょう。

たとえば、「うさぎとかめ」は短い言葉ですが、「うさぎとかめは、かけっこをしてかめが勝った。」と書けば短い文になります。こんなふうには書けば、書かれている内ようがよくわかるようになります。

立ちどまり①を3回、音読してから、小見出しづけにちょうせんしましょう。

### 【小見出し】

立ちどまり①に小見出しをつけてみましょう。

カイコのまゆをひきのぼし  
たもの。白くて軽くてふあ  
ふあしている。

子どものきつねは、**遊び**に行きました。まわたのようになやわらかい雪の上を  
かけ回ると、雪の粉が、しぶきのようにとびちって、小さいにじがすつとうつ  
るのでした。

すると、とつぜん、後ろで、

「ドタドタ、ザーツ。」

とものすごい音がして、パン粉のような粉雪が、ふわあつと子ぎつねにおつか  
ぶさってきました。子ぎつねはびっくりして、雪の中に転がるようにして、十

メートルもこうへにげました。なんだろうと思ってふり返ってみましたが、

何もいませんでした。それはもみのえだから、雪がなだれ落ちたのでした。まだ、

カイコのまゆから取る糸。

えだとえだの間から、白いきぬ糸のように雪がこぼれていました。



もみの木の葉と実



### 【話し合い】

「発表のやくそく」にしたがって、くわしい話しかえを発表しましょう。

### 【小見出し】

立ちどまり②に小見出しをつけましょう。

### 【音読】

小見出しが書けた人から、すわったままで、立ちどまり①と②を何回も音読しましょう。

間もなく、ほらあなへ帰ってきた子ぎつねは、

「お母ちゃん、おててがつかめたい、おててがちんちんする。」

と言って、ぬれてぼたん色ボタンという木の花の色。もも色。になったりよう両手を、母さんぎつねの前にさし出しました。

母さんぎつねは、その手に、はあつと息いきをふっかけて、ぬくといあたたい母さんの手で、

やんわりつつんでやりながら、

「もうすぐあたたかくなるよ。雪をさわると、すぐあたたかくなるもんだよ。」

と言いましたが、かわいいぼうやの手にしもやけができてはかわいそうだから、夜になったら、町まで行って、ぼうやのおててに合うような毛糸の手ぶくろを買ってやろうと思いました。





**【話し合い】**

「発表のやくそく」にしたがって、くわしい話しかえを発表  
しましょう。

**【小見出し】**

立ちどまり③に小見出しをつけましょう。

**【音読】**

小見出しが書けた人から、すわったままで、立ちどまり①  
～③を何回も音読しましょう。

暗<sup>くら</sup>い暗い夜が、ふろしきのようなかげを広げて、野原や森をつつみにやってきましたが、雪はあまり白いので、つつんでもつつんでも、白くうかび上がってしまいました。

親子の銀<sup>ぎん</sup>ぎつねは、ほらあなから出ました。子どものほうは、お母さんのおなかの下へりこんで、そこから真<sup>ま</sup>ん丸な目をぱちぱちさせながら、あっちやこっちを見ながら歩いていきました。

やがて、行く手に、ぼつつり、明かりが一つ、見え始<sup>はじ</sup>めました。それを子ども

ものきつねが見つけて、

「母ちゃん、お星様は、あんなひくい所にも落ちてるのねえ。」

とききました。

「あれは、お星様じゃないのよ。」

おどろいたり、こわかったりして、体がうごかなくなることで、  
と言つて、そのとき、母さんぎつねの足は、  
すくんでしまいました。

あかり。はつきり光っている光。

「あれは、町の灯ひなんだよ。」

その町の灯を見たとき、母さんぎつねは、あるとき町へお友だちと出かけて

ひどい。たいへんな。

( )  
いって、とんだ目にあったことを思い出しました。およしなさいって言うのも聞かないで、お友だちのきつねが、ある家のあひるをぬすもうとしたので、おひやくしようさんに見つかって、さんざん追いまくられて、いのち命を守るのがやつこのこと。命からがらにげたことでした。

「母ちゃん、何してんの。早く行こうよ。」

と子どものきつねがおなかの下から言うのでしたが、母さんぎつねは、どうしても足が進<sup>すす</sup>まないのでした。

**【音読】**

立ちどまり④を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

**【話し合い】**

「母さんぎつねは、どうしても足が<sup>すす</sup>進まな」くなりましたが、母さんぎつねは、これからどうするのでしょうか。

これは、㊦の「予想」ですね。もしこのことについて、予想の書きこみをしている人がいたら、その人から先に発表しましょう。

発表するときは、予想した理<sup>ゆう</sup>由も言えるようにしましょう。「前のところに、こんなことが書かれてあったから、わたしは、きっと母さんぎつねは、こうすると思います。」というような言い方ができるといいですね。

なお、このお話のつづきを知っている人は、友だちの発表を聞いてみましょう。

## 【予想】

それでは、予想の話し合いのまとめとして、次のように4つにまとめてみましょう。あなたの考えは、次のどれに一番近いですか。

ア それでも、母さんぎつねはゆう気を出して、子ぎつねと一しょに町まで行く。 ( ) 人

イ 子ぎつねはあぶないので、母さんぎつねだけが町まで行く。 ( ) 人

ウ 子ぎつねだけを一人で町まで行かせる。 ( ) 人

エ あきらめて、母さんぎつねは子ぎつねと一しょに森の中へもどる。 ( ) 人

## 予想することの楽しみ

お話を読むときは、だれでも次がどうなるのかを楽しみにしています。そして、自ぜんと予想をしています。その予想は、当たったり外れたりするのですが、多くの場合は外れるものです。当たるとうれしいこともあります、そればかりだとつまらないのです。それよりも、外れて、思ってもなかったふうにお話が進んでいく方が、わくわくどきどきおもしろいのです。本当のお話の楽しみは、「意外なてん開」(意味:思ってもなかったようにお話が進むこと)にあるのかも知れません。

### 【小見出し】

立ちどまり④に小見出しをつけましょう。

### 【音読】

小見出しが書けた人から、すわったままで、立ちどまり④を何回も音読しましょう。

## 音読と表げん読み<sup>ひょう</sup>

音読は文字を<sup>お</sup>追って読む読みです。一語一語はつきりと声を出して読みます。まずは、自分が文字を正しく読めるかどうかが大切です。

ところが、書きこみや話しかえや話し合いをした後で、もう一度同じところを読んでみると、同じ文章のはずなのに感じ方がちがっていることに気づきます。

それはなぜなのでしょう。

じつは、同じ言葉、同じ文章を読んでも、今度は、書きこみや話しかえや話し合いをしたことが、次々と頭の中にかんじかんでくるからです。

このように いろいろなことを頭の中にゆたかに思いうかべながら、声を出して読むことを「表げん読み」と言います。

「表げん読み」では、自分が物語を<sup>あじ</sup>味わいながら読みます。そして、自分が『なるほど』と思えるように読んでいきます。だれかに聞いてもらうことを主な<sup>もく</sup>目てきにはしていません。自分の中にもう一人の自分がいて、そのもう一人の自分に読んで聞かせているのです。ですから、分かりにくいところや、ゆっくり味わいながら読みたいところでは、少し<sup>ま</sup>間をとってから次を読み進むこともできます。

音読では、だいたい同じ<sup>はや</sup>速さですらすら読むことが多いのですが、表げん読みでは読む速さは問題ではありません。表げん読みをしているときは、どちらかという、ゆっくり読んでいる人ほど、文章をゆたかに楽しみながら読んでいることになります。

それでは、立ちどまりの④の「表げん読み」にちょうせんしましょう。はじめは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

早くすわった人は、もっとゆっくり読めるようにど力しましょう。



そこで、しかたがないので、ぼうやだけを一人ひとりで町まで行かせることになりました。

「ぼうや、おててをかた方ほうお出し。」

とお母さんぎつねが言いました。その手を、母さんぎつねはしばらくにぎっている間に、かわいい人間の子どもの手にしてしまいました。ぼうやのきつねは、その手を、広げたり、にぎったり、つねってみたり、かいでみたりしました。

「なんだかへんだな、母ちゃん、これなあに？」

と言って、雪明かりに、また、その人間の手にかえられてしまった自分の手を、

物をじつとよく見るようす

しげしげと見つめました。

「それは人間の手よ。いいかいぼうや、町へ行ったらね、たくさん人間の家があるからね。まず、**表**に**円**い**シャツ**ポの**かん板**のかかっている家をさがすんだよ。それが見つかったらね、トントンと戸をたたいて、こんばんはって言うんだよ。そうするとね、中から人間が、すこうし戸を**開**けるからね、その戸のすき間から、こっちの手、ほら、この人間の手をさし れてね、この手にちょうどいい手ぶくろちようだいて言うんだよ。分かったね、**決**してこっちのおててを出しちゃだめよ。」

と母さんぎつねは言い聞かせました。

「どうして？」

( )  
とぼうやのきつねは聞き返しました。

「人間はね、**相手**<sup>あいて</sup>がきつねだと分かると、手ぶくろを売ってくれないんだよ。それどころか、つかまえておりの中へれちやうんだよ。人間ってほんとにこわいものなんだよ。」

「ふーん。」

「決して、こっちの手を出しちやいけないよ、こっちの方、ほら、人間の手の方をさし出すんだよ。」

白つばい銅どうでできたお金  
はくどうか

と言って、母さんのきつねは、**持**<sup>も</sup>ってきた二つの白銅貨を、人間の手の方へにぎらせてやりました。

**【音読】**

立ちどまり⑤を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

**【話し合い】****《テーマ1》**

「母さんぎつね」について話し合しましょう。あなたはどんな書きこみをしていますか。

発表するときには、「何々のところで」というように書きこみをした文を読んでから、母さんぎつねについて発表しましょう。

**《テーマ2》**

「子ぎつね」について話し合しましょう。あなたはどんな書きこみをしていますか。

発表するときには、「何々のところで」というように書きこみをした文を読んでから、子ぎつねについて発表しましょう。

<sup>かん</sup>感想・意見

母さんぎつねや子ぎつねについて話し合いをして、どんなふうに思いましたか。

これまでは、文章をくわしく読んでいって、書きこみを元にくわしく話しかえたりしましたが、今度は、そのぎゃくに文章から考えたことをまとめてみましょう。

ただし、まとめるといっても、あらすじを書くのではありません。読み取ったことに自分の考えを入れてまとめていくのです。

たとえば、「母さんぎつねの心<sup>ばい</sup>配について」とか「人間について」とか「本当に分かったのかな 子ぎつねについて」というように書く内ようを<sup>き</sup>決めて、自分の考えを書いていきます。

お話のはじめから終わりまでのすべてについて書くのではありません。ある場面やある<sup>こと</sup>事がらだけを<sup>と</sup>取り出して書くのです。

その書くなかみは、自分が最も言いたいことであったり、大切だと考えたことであったり、心を<sup>うご</sup>動かされたことであったりします。

さあ、立ちどまり⑤の「感想・意見」にちょうせんしてみましょう。



### 【話し合い】

「発表のやくそく」にしたがって、感想・意見を発表し合いましょう。

### 【小見出し】

--

### 【表げん読み】

立ちどまり⑤の表げん読みをしましょう。始めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

早くすわった人は、もっとゆっくり読めるようにど力しましょう。

子どものきつねは、町の灯を目当てに、雪明かりの野原をよちよちやって行きました。はじめのうちは一つきりだった灯が、二つになり、三つになり、はては、十にもふえました。きつねの子どもはそれを見て、灯には、星と同じように、赤いのや、黄色いのや、青いのがあるんだなと思いました。やがて町にりましたが、通りの家々はもうみんな戸をしめてしまって、高いまどからあたたかそうな光が、道の雪の上に落ちているばかりでした。

けれど、表のかん板の上には、たいてい、小さな電とうがともっていましたので、きつねの子は、それを見ながら、ぼうし屋をさがしていきました。自転



車のかん板や、めがねのかん板や、その他ほかいろんなかん板が、あるものは、新しいペンキでかかれ、あるものは、古いかべのようにはげていましたが、町にはじめて出てきた子ぎつねには、それらのものが、いったいなんであるか分からないのでした。

とうとう、ぼうし屋が見つかりました。お母さんが道々みちみちよく教えてくれた、

下の写真↓

黒い大きなシルクハットのぼうしのかん板が、青い電とうにてらされてかかっていました。

子ぎつねは、教えられたとおり、トントンと戸をたたきました。



シルクハット

( )  
「こんばんは。」

すると、中では何かコトコト音がしていましたが、やがて、戸が一寸いっすんほどゴ

ロリと開いて、光のおびが、道の白雪の上に長くのびました。

とつぜんのことにおどろいてうろたえること。

子ぎつねは、その光がまばゆかったので、面めんくらって、まちがった方の手

37

を、——お母さまが、出しちやいけないと言ってよく聞かせた方の手を、すき  
間からさしこんでしまいました。

「このおててにちょうどいい手ぶくろ、ください。」

**【音読】**

立ちどまり⑥を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

**【話し合い】**

子ぎつねは、お母さんが、出しちゃいけないといって、よく聞かせた方の手を、すき間からさしこんでしまいました。さあ、どうなるのでしょうか。あなたはどんな書きこみをしていますか。

これは、㊦の「予想」ですね。もしこのことについて、予想の書きこみをしている人がいたら、その人から先に発表しましょう。

発表するときは、予想した理由も言えるようにしましょう。「前のところに、こんなことが書かれてあったから、わたしは、きっとこうなると思います。」というような言い方ができるといいですね。

なお、このお話のつづきを知っている人は、友だちの発表を聞いてみましょう。



### 【話し合い】

「発表のやくそく」にしたがって、感想・意見を発表し合いましょう。

### 【小見出し】

--

### 【表げん読み】

立ちどまり⑥の表げん読みをしましょう。始めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

早くすわった人は、もっとゆっくり読めるようにど力しましょう。

すると、ぼうし屋さんはおやおやと思いました。きつねの手です。きつねの手が、手ぶくろをくれと言うのです。これはきつと、木の葉こで買いに来たんだなと思いました。そこで、

「先にお金をください。」

と言いました。きぎつねは、すなおに、にぎってきた白銅貨はくどうかを二つ、ぼうし屋さんにわたしました。ぼうしさんは、それを人さし指ゆびの先にのつけて、かち合せてみると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉こじゃない、ほんのお金だと思いましたので、たなから子ども用の毛糸の手ぶくろを取り出してきて、きぎつねの手に持たせてやりました。きぎつねは、お礼れいを言って、また、もと来た道を帰り始めました。



**【音読】**

立ちどまり⑦を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

**【話し合い】****《テーマ1》**

「発表のやくそく」にしたがって、「ぼうし屋さんになって」のくわしい話しかえを発表し合いましょう。

**《テーマ2》**

この後、物語では、子ぎつねは、もと来た道を帰るとき、母さんぎつねの言葉を思い出しながら人間について思うのですが、どんなふうに思ったのでしょうか。想ぞうしてみましょう。

話しあった後、次のページに、子ぎつねになってひとり言を書きましょう。





### 【話し合い】

「発表のやくそく」にしたがって、子ぎつねのひとり言を  
発表し合いましょう。

### 【小見出し】

--

### 【表げん読み】

立ちどまり⑦の表げん読みをしましょう。始めは立って読み、  
2回目からはすわって何回も読みましょう。

早くすわった人は、もっとゆっくり読めるようにど力しましょう。

「お母さんは、人間はおそろしいものだっておっしゃったが、ちっともおそろしくはないや。だって、ぼくの手を見ても、どうもしなかったもの。」

と思いました。

けれど、子ぎつねは、いったい人間なんてどんなものか、見たいと思いました。

あるまどの下を通りかかると、人間の声がありました。なんとというやさしい、

なんとという うつく しい、なんと 落ち おおつとりした声 お なんです お しょう。

「ねむれ ねむれ

母のむねに、

ねむれ ねむれ

母の手に――」。

子ぎつねは、その歌声は、きつと、人間のお母さんの声にちがいないと思いました。だって、子ぎつねがねむるときにも、やっぱり母さんぎつねは、あんなやさしい声でゆすぶってくれるからです。

すると、**今度**<sup>こんど</sup>は、子どもの声がしました。

「母ちゃん、こんな寒い夜は、森の子ぎつねは、寒い寒いって、ないてるでしょうね。」

( )  
すると、母さんの声が、

「森の子ぎつねも、お母さんぎつねのお歌を聞いて、ほらあなの中でねむろう  
としていてでしょうね。さあ、ぼうやも早くねんねしなさい。森の子ぎつねと  
ぼうやと、どっちが早くねんねするか、きつと、ぼうやの方が早くねんねしま  
すよ。」

それを聞くと子ぎつねは、**急**<sup>きゅう</sup>にお母さんがこいしくなって、お母さんぎつね  
の**待**<sup>ま</sup>っている方へとんでいきました。



### 【話し合い】

「発表のやくそく」にしたがって、くわしい話しかえを発表し合いましょう。

### 【小見出し】

--

### 【表げん読み】

立ちどまり⑧の表げん読みをしましょう。始めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

早くすわった人は、もっとゆっくり読めるようにど力しましょう。

お母さんぎつねは、心配しながら、ぼうやのきつねの帰って来るのを、今か今かと、ふるえながら待っていましたので、ぼうやが来ると、あたたかいむねにだきしめてなきたいほどよろこびました。

二ひきのきつねは、森の方へ帰っていきました。月が出たので、きつねの毛なみが銀色に光り、その足あとには、鉄てつのなか間。きらきらする銀のようなはいい色をしている。コバルトのかがたまりました。

「母ちゃん、人間ってちつともこわかないや。」

「どうして？」

「ぼう、まちがえて、本当のおてて出しちゃったの。でも、ぼうし屋さん、つ



( )

かまえやしなかったもの。ちゃんと、こないいいあたたかい手ぶくろくれたもの。」

と言って、手ぶくろのはまった両手を、パンパンやってみせました。お母さん  
ぎつねは、

「まあ！」

とあきれましたが、

立ちどまり⑨

「本当に人間は、いいものかしら。本当に人間は、いいものかしら。」  
とつぶやきました。

**【音読】**

立ちどまり⑨を音読しましょう。1回目だけ立って読んで、2回目からはすわって読みます。何回も声を出して読みます。

**【話し合い】**

母さんぎつねは、子ぎつねに「人間って、ほんとにこわいもの」と教えたが、町から帰ってきた子ぎつねは、「人間ってちっともこわくないや。」と言います。そして、母さんぎつねは、「本当に人間は、いいものかしら。」と言います。

この親ぎつねと子ぎつねに、あなたは何か言いたいことはありませんか。

話し合ってみましょう。



## 【小見出し】

## 【表げん読み】

お話のはじめから全部を表げん読みで読みましょう。始めは立って読み、2回目からはすわって何回も読みましょう。

早くすわった人は、もっとゆっくり読めるようにど力しましょう。

## 「<sup>ぜん</sup>全文感想・意見」と「ふく題」つけ

このお話を読み終えるにあたって、「全文感想・意見」と「ふく題」つけをしましょう。

「全文感想・意見」では、このお話全体をふり返って自分の考えをまとめます。この「全文感想・意見」の場合も、これまでの「感想・意見」の時と同じように、お話のあらすじを書くではありません。『手ぶくろを買いに』を読み終えて、自分をもっとも言いたいと思ったこと、大切だと考えたこと、心を動かされたことなどを書きます。

ところで、この「全文感想・意見」にも題をつけますが、その題をそのまま『手ぶくろを買いに』の「ふく題」とします。ふく題は、少し長めに書いて、そのふく題を読めば「全文感想・意見」の内ようがわかるようにします。ふく題は、「小見出し」と同じように、<sup>・</sup>文で書くとよいでしょう。

ふく題つきの「全文感想・意見」が書けたら、友だちどうしで読み合いましょう。その後、友だちの「全文感想・意見」について、自分の感想や意見を書きましょう。(用紙は後で先生からいただきます。59 ページ)

『手ぶくろを買ひに』を読んで  
名前

ぶくろ...  
...

( )

名詞(

)

( )





## このテキストに出てきた 3 年生の漢字 (1)

漢字	出てくるページ		せつ明の中の言葉	お話の中の言葉
	せつ明	お話		
号	1		番号	
館	1		図書館	
題	1		本の題	
想	1		想ぞう 感想	
葉	1		言葉	
使	1		うらを使う	
発	2		発表	
表	2	29	発表 表現	表 (おもて)
始	2	21	始める	見え始める
次	3		次のページ	
注	3		注意	
意	3		注意 意見 意味	
横	4		言葉の横	
寒	5		寒い	寒い
整	6		整理	
対	6		それに対して	
章	6		文章	
所	6	7	さいしょの所	母さんぎつぬの所
転		7		転げる 転がる 自転車
予	9		予想	
軽	9		軽い	
消	9		消す	

## このテキストに出てきた3年生の漢字(2)

漢字	出てくるページ		せつ明の中の言葉	お話の中の言葉
	せつ明	お話		
終	10		終わる	
取	32	11	取り出す	取りのける
様		11		お日様
反		11		反しゃ
受		11		受ける
短	14		短い	
勝	14		勝つ	
遊		15		遊ぶ
向		15		向こう
返		15		ふり返る 聞き返す
落	46	15	落ち着く	落ちる
実	15		葉と実	
両		18		両手
息		18		息をふっかける
暗		21		暗い
銀		21		銀ぎつね
真		21		真ん丸
追	27	23		追いまくられる
命		23		命からがら
進	24	23	進む	進む
由	24		理由	
開	25	29	意外なてん開	戸を開ける

## このテキストに出てきた 3 年生の漢字 (3)

漢字	出てくるページ		せつ明の中の言葉	お話の中の言葉
	せつ明	お話		
味	25		意味 味わう	
速	27		同じ速さ	
板		29		かん板
決	32	29	決める	決して
相		30		相手
持		30		持つ
感	32		感想	
配	32		心配	
事	32		事がら	
動	32		動く	
屋		35		ぼうし屋
他		36		その他
面		37		面くらう
指		41		人さし指
礼		41		お礼
美		46		美しい
度		47		今度
急		48		急に
待		48		待つ
鉄	51		鉄 (てつ)	
全	56		全文 全体	

**【感想】**

名前\_\_\_\_\_

このべん強は、楽しかったですか。下のア～オに○をつけ  
ましょう。

ア たいへん楽しかった

イ 楽しかった

ウ 楽しくもつまらなくもなかった

エ 楽しくなかった

オ <sup>ぜん</sup>全ぜん楽しくなかった

---

主な研究文献

- 「今から始める一読総合法」(児童言語研究会 編 一光社)
- 「一読総合法入門」(児童言語研究会 編 明治図書)
- 「新・一読総合法入門」(児童言語研究会 著 一光社)
- 「国語教育の過去・現在・未来像」(大木正之 編著 一光社)
- 「小学校の教室から文学の授業を問う」(三輪民子 著 一光社)
- 「一読総合法の実践入門 その系統的指導」(林進治 著 一光社)
- 「国語・読みの授業 小学3年」(児童言語研究会 編 一光社)
- 「国語の授業」誌 No.55 (1983年4月 児童言語研究会編集 一光社)
- 「国語の授業」誌 No.32 (1979年6月 児童言語研究会編集 一光社)
- 光村ライブラリー9「手ぶくろを買いに◇ほか」(光村図書)
- 「教科書にでてくるお話 3年生」(監修 西本鶏介 ポプラ社)
- 「てぶくろをかいに」(新美南吉 作 いもとようこ 絵 金の星社)